十人十走 お伊勢参らば 朝熊を駆けよ！

大会の裏側に迫る！

地元への思いが形になって生まれた

「伊勢の森トレイルランニングレース2012」

トレイルランニングのレースで忘れてはならないのが大会を運営する人たちの存在だ。大会で咲く参加者の笑顔の裏にはスタッフの苦労がある。そこで昨年初めて開催された「伊勢の森トレイルランニングレース」の主催者および発案者に、大会が開催されるまでのいきさつやコースが決まるまでの経緯などについて取材した。

取材／上原伸一　写真／中岡隆造

地元の人と一体になった石川弘樹さん

「おかげまいり」で賑わった江戸時代から「お伊勢さん」には「おかげさまの心」が宿っている。この「おかげさまの心」と「お伊勢さん」の雰囲気が大好きだというソル・スポーツマネージメント（以下、SOL）の執行役員・深井正吉さんは、愛してやまないこの地でスポーツ交流に協力できないかと考え、ある提案をする。それがトレイルランニングレースだった。今から4年ほど前のことだ。当時は時期尚早として受け入れられなかったが、歳月を経て一気に前進する。伊勢市まちづくり市民会議産業分科会において、林業活性化の話題から「伊勢の森を知って欲しい、木や森のことに興味を持って欲しい。そのためにも森に入って来て欲しい」という意向が発せられたのだ。この場に出席していた（三重県営サンアリーナの指定管理者である）スコルチャ三重の常務取締役・山本久徳さんがこの意向を即座に、かねて深井さんから聞いていたトレイルランニングレースと結び付け、さらに即決即断で自ら主催も買って出たことで、「伊勢の森トレイルランニングレース2012」は産声を上げた。

レースで一番大事なコースをどうするか？という話になった時、大会のプロデューサーを任じられたSOL・深井さんは、石川弘樹さんの名を挙げる。深井さんはプロトレイルランナーで数々のレース運営も手掛けている石川さんと、あるテレビ番組をきっかけに親交があった。深井さんは「トレイルランニング界の第一人者である石川さんの人となり、トレイルに対する思いやりや姿勢に好感を持っていたので」と振り返る。

やがて石川さんが伊勢の森を訪れると、試走を終えた石川さんはこの森に大きな興味を示し、この森を走るのがどんなに素晴らしいことなのか、生き生きとした表情で大会関係者に話し出したという。この様子を見て深井さんは「やはり石川さんしかいないと確信しました」。石川さんはレース運営をする際、「地元の人たちにレースの主旨やトレイルランニングはどういうものかをしっかり伝えるのが大事」と考えている。「伊勢の森トレイルランニングレース2012」のコースプロデューサーとしても、その姿勢そのままだった。必ず地元の人と連携を取り、地元の人と一つになってコースのセッティングをしていった。その過程の中で、埋もれていた古道の発見もあったそうだ。

プロトレイルランナーの石川さんは大会当日もスタッフの一員として額に汗していた

深井さんによると、石川さんは準備段階から地元の人たちから大いに愛され、感謝されてもいたようだ。石川さんは常々、「トレイルランは自然があってこそのものだし、自然がなければできない。自然を使わせてもらっているのだから、自然を守っていく」という発想も大切」と話すが、こうした精神も伊勢の森を愛する地元の人たちに受け入れられる要因になったのだろう。石川さんは大会当日、プロトレイルランナーの第一人者であるにも関わらず、あくまでも1人のスタッフに徹し、スタッフの一員として汗を流していた。

一方、コース上の許認可を得るのは容易ではないと思われた。主催事務局の一員として大会の準備に奔走したスコルチャ三重の伊藤睦子さんによると「いくつもの困難が予想された」という。

「そもそもフィールドそのものが『伊勢志摩国立公園』に位置するのと、トレイルランニングのレースが伊勢志摩地方で初開催という事情もありました。環境省、伊勢市、神宮司庁、地権者、そして地元の方々にご理解いただき、20㎞全行程上の許認可を得るのも、また今大会のフィールドである『朝熊山』は昔から猟が行われている山で、かつ大会が行われる12月は最盛期のため、地元の猟友会さんにご協力いただくことも、当初はかなり高いハードルに感じました」

全許可権者を探し出し説明の機会を得て、諸手続きを終えるまでには3カ月を要したものの「みなさん、この伊勢では初めての試みを本当に快く、協力的にご了解下さいました。実際は高いハードルはなかったという印象です」（伊藤さん）。

こうして朝熊山山頂から伊勢湾を望む絶景も堪能できるコースが生まれた。ただ「参加者の方にはあるがままの伊勢の森を見ていただきたかった」（伊藤さん）ことから、コースを整備し過ぎないよう意識したという。また伊勢全体の魅力も味わってもらおうと、伊勢の森だけでなく、お伊勢ならではの町並み（おはらい町）もコースに組み入れられた。

主催事務局の一員として大会の準備に奔走したスコルチャ三重の伊藤さん

より良い地域作りのきっかけにしたい

「伊勢の森トレイルランニングレース2012」では「チャリティランナー枠」が設けられた。エントリー時に参加費プラス500円のチャリティ費をおさめた出場者を「チャリティランナー」と認定し、スタート地点にチャリティランナー優先ゾーンを作ることで参加者・関係者一同が敬意を表した。伊藤さんはチャリティの主旨について「寄せられた募金は伊勢志摩国立公園協会を通して、伊勢志摩地方の環境保全・自然体験プロジェクト等に充てさせていただきます。レースとともにチャリティに参加されたみなさんの厚意を、『また行きたい』と思っていただける地域作りのきっかけにできればと考えています」と説明してくれた。

ほとんどの大会スタッフがトレランのレースは初めてである上、当日は容赦なく様々な対応に迫られた。あいにくの強風のため、第1エイドステーションの移設を余儀なくされる一幕も。伊藤さんは「距離が短いのでトップ選手が来るまで間に合うかハラハラしました」と明かす。それでもボランティアを含むスタッフ全員が、参加者が無事にゴールできるよう細心の注意を払った結果、「前日までの雨でぬかるんだトレイルで転倒し流血をした方や、下りでヒザを痛めて思うように走れなかった方はいたものの、大きなケガをした方はなく、フィニッシュ地点では楽しそうな清々しい笑顔をたくさん見ることができました」。伊藤さんは家族やカップル、あるいは友達同士が手をつないでゴールする姿を見て、心がほっこりしたそうだ。

大会が終わって間もなく、伊藤さんら大会運営者の姿は朝熊山にあった。コース上にゴミは落ちていないか、走路になったことで自然が傷んだところはないかなど、チェックするためだ。そう、大会運営者にとってのレースはまだ終わっていなかった。

SOL・深井さんの発想に端を発し、これをスコルチャ三重・山本さんが市民会議の思いと繋ぎ、自ら主催することで、形となって生まれた「伊勢の森トレイルランニングレース」。「地元を愛する人々に少しでも貢献できて、そのことで参加者のみなさんも喜んでもらえれば」（伊藤さん）という願いを持って取り組む人々のもと、今年第2回が行われる予定だ。

ゴール会場となった三重県営サンアリーナはレース後も抽選会などで盛り上がっていた